

人と感情—進化はなにをもたらしたか

九州大学大学院医学研究院精神病態医学 神庭重信

林道彦先生から、朝倉記念病院35周年記念誌に寄稿するようにと誘っていただき、光栄なことなのでその場でお引き受けしたが、知ったかぶりをして病院のことを書くわけにもいかず、どのような話が相応しいのかもわからずに、時間だけが過ぎてしまった。そこでエッセイのテーマになりそうな妙案が浮かばないかと書架の本の背表紙を目で追っていたとき、チャールス・ダーウィンの歴史的著書「Expression of the Emotions in Man and Animals (邦題、人及び動物の表情について、岩波訳)」が目にとまった。7年前にドイツの友人マルチン・ブリュンを日本統合失調症学会(九大主催)に招いたとき、彼からお土産だと渡されたものである。彼もまた進化心理学に魅せられている精神科医の一人で、知り合っただけこれ20年になる。

この本の大きさは、縦20 cm、横13 cm、厚さ4 cm。374ページの厚手の紙がモスグリーン色をした分厚い紙のカバーで閉じられている。表紙をめくると1872年出版とある。本書がはじめて世に出た年と間違いない。なんと初版本だったのだ。過去150年の間に、いったい何人がこの本を手にしたのだろうか、ちょっと乱暴に扱えばカバーがちぎれそうなほどに綻びている。しかし、ダーウィン進化論に魅せられている者にとっては聖書である。とてつもない贈り物だったのだ。

このような次第で、ありふれた主題になってしまうが、情動や感情(以下、感情とする)のことを、進化にも多少触れながら、書いてみたくなった。

精神疾患は感情の障害を巻き込んで起こってくる。気分障害、パニック症、強迫症、恐怖症、適応障害やPTSDなどはまさに感情の病である。認知機能の障害が一次障害であると考えられている統合失調症でも、患者のこころは恐怖で震えている。妄想や幻覚は、それが了解できないとしても、患者の抱える恐怖には共感することができる。いや私たちは、共感しなければならぬのである。パーソナリティ障害も認知症のBPSDもまた、感情の強い動揺が基底にある。そこで次に、私たちがもつ感情の意味を進化生物学の視点から考えてみたい。

脳の原器は5億年前のホヤに発生したと言われている。爬虫類から哺乳類へと進化したときにピエール・ポール・ブローカが命名したle grand lobe limbiqueすなわち大脳辺縁系が大きく進化する。人はみな、基本的な生命維持機能である自律神経機能に加え、快・不快という基本的感情を備えて生まれてくる。これは感情が個の生存と継承を巧みに保証しようとする装置だからである。たとえば、乳児にとって空腹を知らせる唯一の手段は泣くことである。乳を与えられて快に満たされるならば、乳首から口を離し、穏やかな眠りにつく。口に含んだものがまずければ、不快な感情とともに嘔吐反射が誘発される。快・不快は、全身の動きを伴って表現され、乳児が他者と交信できる唯一の手段でもある。

やがて成長に伴い、運動・感覚系機能、認知・記憶系機能、言語系機能が発達すると、人は鮮明な意識をもち、明晰に考えることができるようになる。現象としての世界を把握し、自己と他者の存在を知り、お互いの気持ちや考えを理解して、協力行動が生まれる。時には、相手の意図を読み、裏をかこう

として、恥や自責と誇りの間で揺れ動くこともある。そうかと思えば、共感、愛、利他行動のような、高度な感情を示して、複雑な人間関係を築きながら集団に帰属して生きる。真と偽、善と悪、美と醜を認識し、超越した存在を概念化できる存在へと長い年月をかけて変わってゆく。

一方で私たちには、悲哀、失望、うつなどの強い負の感情が備わっている。親しい人を失ったときには悲嘆に暮れ、夢が破れるならば絶望の内にもがき苦しむ。悲しみやうつは免疫系を巻き込んで身体機能を低下させる。これら負の感情は一見すると個の生存に不利のように思われる。しかし、これらの感情は私たちに何かを教えようとしているのではなからうか……。

やがて老いて脳の萎縮がおき、認知機能が大きく損なわれる時がきても、感情は最後までその活動を維持し続け、人であることを証する。このことをよく表した、ドイツの作家エーリッヒ・ケストナーの一文を紹介したい。ちなみにぼくは今でもこの児童文学作家が好きである。

ケストナーが、認知症のために療養所に生活する母親を見舞った時のことである。彼の母親は、自分の身の回りのことはみな忘れ、すでに人の顔を認識できなくなっていた。彼に気づいた母親は、「わたしにうなずきかけ、こうたずねた。『エーリッヒはいったいどこにいるの』母は息子のことをわたしにきいたのだ。わたしは胸を締めつけられる思いがした。母が放心状態で橋の上に立っていたあのときのように。(中略) 今、母の目は、わたしをさえ、彼女の唯一の目標と幸福であったわたしをさえ、忘れてしまった! だが、忘れたのは目だけで、母の心は忘れていなかった。」「(わたしが子どもだったころ、高橋健二訳より)

人の一生は、遺伝子に起きる突然変異、減数分裂の際の染色体間の乗り換え、エピゲノム修飾、受精卵の着床の成否、妊娠中の胎内環境、出産時の条件、そしてその後の長い年月をかけた成長過程で出会うさまざまな出来事からなる。これらすべては偶然と必然とが綾なす世界である。人は、その誕生の時から生命を終えるまで、不幸な偶然に弄ばれ、あるいは幸運をはずみとして生きる存在である。そのつど感情に支配されながら、その人が生きる社会の歴史の流れの中を生きる。

このことを人間行動遺伝学の知識を援用して加筆するならば、以下ようになる。環境があって初めて目覚める脳の遺伝子がある。その遺伝子の働きを受けた行動は、周囲の環境を変えていく。環境は再び個人の感情、認知そして行動に影響を及ぼし、脳の遺伝子が再び修飾される。これは遺伝子—環境相関と呼ばれる。単純な例を挙げるならば、不安の強い気質を生む遺伝子群をもつ子供が、同じく不安の強い親の元で育てられるならば、その子はますます不安の強い子供に育つだろう。しかしおおらかな親の元で育つならば、もともとの遺伝的気質は環境によって抑制されるに違いない。多くの精神疾患の形成過程にもこの遺伝子—環境相関をみることができはずだ。精神医学は、遺伝か環境か、脳か心理か、という二者択一の議論を離れ、両者がどう関わり合うのか、という問いへと向かっている。

脳の遺伝子と環境はこのように、感情と行動を介して、相互に影響を及ぼし合う。さらに、遺伝子は文化や時代精神とも作用し合い、環境や文化は特定の精神疾患を生む土壌となる。そもそも20万年前に大きな進化を終えた私たちの脳は160人前後の集落での共同体生活に最も適しているとも言われる。精神疾患の生涯罹患率が24% (米国では46%) を越えるのも、診断のインフレーションというクリシェだけに帰することはできない。

生物38億年の進化は感情を生み、人は最も高度な感情をもつようになった。感情は精神疾患の構成要素であり、人が環境や文化と関わる媒体でもある。“感情”はありふれた言葉であるが、私たちが知らないことが未だに多すぎる。だが近い将来に、脳についての私たちの知識は爆発的に増え、進化生物学も飛躍的に進歩する日がくる。そのとき、感情の生得的で普遍的な構造と、それが変形され精神病理として現れる仕方と、さらにはその恒常性を取り戻す仕方とを、深く理解できているに違いない。